

捨て仮名の機能

—— 一二世紀前半の例に基づく検討 ——

富士池 優美

一 はじめに

国立国語研究所「通時コーパスの設計」プロジェクトでは、古典テキストに対して形態素解析を施す研究が進められている。その中で、『今昔物語集』の形態論情報〔付きコーパスの構築に向け、新編日本古典文学全集『今昔物語集』一～四（小学館、以下「新編全集」とする）に基づくテキスト整形が行われた。

『今昔物語集』には「汝子」「此カク」のような、漢字の読みの一部（もしくは全体）を仮名で送る表記がある。このような仮名は「捨て仮名」と呼ばれる。形態素解析にあたり、漢字の一部（もしくは全体）の読みを仮名で送る捨て仮名は形態素の重複となり、解析精度低下の原因となる。そのため、捨て仮名部分を形態素解析対象から除外し、捨て仮名として除外された文字をXMLタグに記録することとなった。『法華百座聞書抄』についても同様に、形態論情報付きコーパスの構築に向け、『校註法華百座聞書抄』に基づく電子化作業及びテキスト整形が行われた。『今昔物

『語集』における捨て仮名のテキスト整形にあたっては新編全集の頭注を参考にしたが、実際に形態素解析結果の人手修正をはじめたところ、頭注に指摘はないが似たような表記（例「菓子」）が散見された。

本稿では、形態素解析を前提としたコーパスにおける捨て仮名処理の方法を紹介する。そして一二世紀前半の片仮名漢字交じり文資料である『今昔物語集』『法華百座聞書抄』のコーパス構築過程で得られた捨て仮名の実態を報告するとともに、その機能について考察する。

二 問題の所在

二・一 捨て仮名の処理

和漢混淆文に対して形態素解析を施すにあたり、漢文の要素が交じっていることに起因する問題がある。その一つが形態素の重複であり、形態素の重複があると文字と形態素との対応を上から順に取れないことが問題となる。捨て仮名はこの形態素の重複に当たる。『今昔物語集』コーパスの形態論情報付きコーパスの構築に向け、形態素の重複を解消すべく、前もって整備する必要があると考え、テキスト整形を行った⁽²⁾。

『今昔物語集』の捨て仮名には、「汝チ」の「チ」のように最後の一字が捨て仮名となるもののほか、「候フウ」のように「さぶらう」の「ぶ」の部分を表記したと思われるものもある。そこで、テキスト整形の際、頭注の記述を参考に捨て仮名を洗い出し、X M Lタグ付けにより、捨て仮名部分を形態素解析対象から除外した⁽³⁾。X M Lタグには、捨て仮名として除外された文字列であることのほか、元の表記を記録した。処理対象となった捨て仮名は、新編全集『今昔物語集』（本朝部）全体で一三二箇所、表記にして二四〇種類超であった。以下に捨て仮名の処理例を示す。

汝チ ↓ 汝
努々メ ↓ 努々

此カク ↓ 此
今夜ヒ ↓ 今夜

候フウ ↓ 候ウ
(太文字・捨て仮名)

このように『今昔物語集』コーパス構築の前処理としてのテキスト整形においては、頭注の記述を参考に捨て仮名かどうかの認定を行うことができた。しかし、コーパス構築にあたり、「捨て仮名」であるかどうか参考にできる情報があるとは限らない。そうなると、情報がないがテキスト整形は行いたいとなった場合、どのような表記を捨て仮名とするのかということがまず問題となる。

二・二 捨て仮名とは

「捨て仮名」は、『日本語学研究事典』や『日本語大事典』に立項されておらず、「送り仮名」の項目中に現れる。『日本語大事典』には「捨て仮名、副仮名と呼ぶこともあるが、その範囲はかならずしも明確ではない」とある。また『日本国語大辞典 (Japan Knowledge)』には

- (1) 漢文を訓読する時、漢字の意味を日本語にいい替えるために、助詞、助動詞、活用語尾の類を漢字の下に小さく添えて書くかなのこと。送りがな。
- (2) 促音・拗音などを表すのに用いる小さな字。「つ」「や」「ゆ」「よ」「イ」「オ」の類。
- (3) 他の読み方をされるおそれのある漢字の最後の一字をかたかなで、その漢字の下に小さく添えたもの。これによって、その場合の読み方をはっきりさせる。「様ン(さん)」「二人リ(ふたり)」の類。

とある。捨て仮名は送り仮名の一種であるとともに、狭義では「他の読み方をされるおそれのある漢字の読みをはっきりさせる」ために「小さく添えた」仮名ということができらるだろう。

二・三 先行研究

『今昔物語集』の捨て仮名については、山田ほか（一九五九―一九六三）の解説に例示がある。解説の中で『今昔物語集』の捨て仮名について、「活用語においては不変化部分についてまでかなを送り、体言・副詞に関してはその語末のかなを特に多く送るといふ傾向」があることを指摘し、これを「活用語尾を示す送りがなと区別する意味で、特に捨てがなと呼ぶことにする」⁽⁴⁾としていた。捨て仮名は「不統一極まるもの」であり、捨て仮名の類で「最も極端なものが、いわゆる全訓捨て仮名とかりによぶところのものである」⁽⁵⁾「これらの表記法は、恐らく編者もしくは書記者の備忘の為に附せられたものかと思うが、特別難読の語に限ってついたという形跡は見られない」とする。また、捨て仮名は東大寺諷誦文稿や打聞集や草案集にも見られ、「漢文訓読における大小の傍訓を、かな交りに書き下すに際して本文の中に随時繰り入れれば自然にかくの如き現象が起る」「流布本の表記法が宣命がきから遠ざかるにつれて、これらの捨てがなもまた、次第に消滅の一途をたどる」とする。

宣命書きと捨て仮名の関連については、酒井（一九六七）、酒井（一九六八）にも指摘がある。「漢字の音訓の一部または全部を活用語のようにかなで小書するいわゆる捨てがなは、本集をはじめとして、「打聞集」や「草案集」・「金澤文庫本仏教説話集」・「天海藏本諸事表白」等に普通な用字法であるが、一般に流布本では、これを脱する傾向が濃厚である」⁽⁶⁾とし、流布本で捨て仮名が少なくなることについて「今昔物語集において、宣命書きで無くなる流布本には、捨てがなが激減する」「捨てがなは、片仮名宣命体の特徴的表記なのであります」⁽⁷⁾としている。さらに、酒井（一九六八）は、訓点資料に見られる捨て仮名を例示した上で、「聞き書き類においては師の訓みを忠実に伝えるために、筆録類においては読み手に誤読されまいとして、こうした捨てがな表記は一層の盛行をみることもあったものでしょう」としており、表記との関わりのほかに、積極的に捨て仮名表記がされる資料があることを指摘している。

二・四 調査対象

調査対象は、コーパス構築の対象となった以下の二資料である。

一つは『今昔物語集』である。『今昔物語集』は一二二〇年頃成立したとされる、説話集である。三二巻から成り、物語の場によって巻一から五の天竺部、巻六から一〇の震旦部、巻一一から三一の本朝部の三部に分かれる。新編全集『今昔物語集』に収録されているのは本朝部である。表記は、自立語は漢字、活用語尾は付属語は片仮名で小さく書く、片仮名宣命書きと呼ばれる形式で統一されている。本稿では、『今昔物語集』現存最古の写本であり捨て仮名が多く見られる鈴鹿本を底本とした巻の中から、巻一二を調査対象とした。

もう一つは『法華百座聞書抄』である。『法華百座聞書抄』は天仁三年（一一一〇年）二月二日から三〇〇日間にわたって講じられた法華経・阿弥陀経・般若心経の説教の聞き書きである。計三五の説話を含む二〇日分の説教が筆録されている。表記は片仮名を主体とした片仮名漢字交じり形式である。二〇日分の説教全てを調査対象とした。

この二つの資料は同時代の片仮名漢字交じり文資料として位置づけられる。ともに漢字の読みの一部（もしくは全体）を仮名で送る表記、いわゆる捨て仮名が存在するものである。『今昔物語集』が片仮名宣命体による資料であるのに対して、『法華百座聞書抄』は聞き書き類ということになる。

三 『今昔物語集』巻一二の捨て仮名

三・一 調査の概要

仮に、「他の読み方をされるおそれのある漢字の読みをはっきりさせるために小さく添えた仮名」が捨て仮名であるとするならば、捨て仮名がある場合とない場合、複数の表記をもつて、「読み」ないし「語」の書き分けを行っているはずである。

『今昔物語集』巻一二について、形態素解析結果（人手修正済み）を用い、①頭注で指摘された捨て仮名の語の表記のバリエーション、②頭注で指摘された捨て仮名の語に対して、捨て仮名がない表記でどのような語が表されているのか、③頭注で指摘された以外に仮名が添えられるかどうかで書き分けされる語があるのかの三点を調査し、影印本

を用いて鈴鹿本での表記を確認した。なお、「小さく添えた仮名」の読みが活用語尾を表す場合は、いわゆる「送り仮名」に該当すると考え、活用語は今回の調査の対象外とした。

三・二 頭注で指摘された捨て仮名の語の表記バリエーション

図表1に巻一二中の頭注で指摘された捨て仮名の語の表記バリエーションと「汝子」「成ナル」の捨て仮名例を示した。⁷⁾。「成ナル」のような全訓捨て仮名については、「全訓」列に○を付した。また、「汝」(「汝子」の「子」がない表記)のような捨て仮名のない表記については、「漢字のみ」列にその用例数を示した。巻一二においては、頭注にて三三種類の捨て仮名が指摘されており、延べ六五箇所にタグ付け処理を行った。

この中で、「云イ」「成ナル」は全訓捨て仮名であり、活用語に捨て仮名を付すことにより読みをはっきりさせる目的があったものと考えられる。

その一方で、捨て仮名が添えられた表記が比較的多く出現している「ナンジ」「ムカシ」「マタ」のような語は、漢字の読みが複数あるわけではなく、仮名が付されていないなくても他の読み方をされるおそれはない語である。このことから、『今昔物語集』の捨て仮名は、必ずしも、「漢字の読みをはっきりさせる」ものであるとは限らないということがわかる。

また、捨て仮名が添えられた表記と漢字のみの表記の出現頻度をそれぞれの語で比較してみると、「智^チリ」のように捨て仮名が添えられた表記と添えられていない表記とで同頻度のもものもあるが、「形^チ」「験^シ」等のように、ほとんどの捨て仮名表記が頻度一の捨て仮名である。つまり、臨時的に付されたことが多い様子がうかがえる。このようなことから、『今昔物語集』の捨て仮名は、決して体系的なものではないということが言える。「タマタマ」「ヒジリ」のような漢字のみの表記が出現していない語に関しては、「適^マ」「聖^リ」といった表記が当時の慣習的な表記であった可能性があるとと言えるだろう。

図表1 頭注で指摘された捨て仮名の語の表記バリエーションと捨て仮名例

	読み	種類	全訓	品詞	捨て仮名	漢字のみ	総計
1	ナンジ	汝ヂ		代名詞	20	24	44
2	ムカシ	昔シ		普通名詞	5	49	54
3	マタ	亦タ		副詞	4	93	97
4	サトリ	智リ		普通名詞	3	3	6
5	ヨル	夜ル		普通名詞	2	4	6
6	タテマツル	奉ツ		動詞	2	130	132
7	タビ	度ビ		普通名詞/助数詞	2	7	9
8	ヒトエニ	偏へ		副詞	2	13	15
9	カタチ	形チ		普通名詞	1	12	13
10	シルシ	験シ		普通名詞	1	13	14
11	モノ	者ノ		普通名詞	1	31	32
12	ノチ	後チ		普通名詞	1	104	105
13	ヒル	昼ル		普通名詞	1	4	5
14	タメ	為メ		普通名詞	1	53	54
15	アイダ	間ダ		普通名詞	1	120	121
16	ソモソモ	抑モ		普通名詞	1	1	2
17	ヒト	人ト		普通名詞	1	233	234
18	タマタマ	適マ		副詞	1	0	1
19	ユメ	夢メ		普通名詞	1	41	42
20	キミ・ギミ	君ミ		接尾辞	1	6	7
21	シルシ	注シ		普通名詞	1	0	1
22	トモ・ドモ	共モ		普通名詞	1	7	8
23	ヒジリ	聖リ		普通名詞	1	0	1
24	カズ	員ズ		普通名詞	1	6	7
25	ココロ	心ク		普通名詞	1	81	82
26	アラズ	非ラ		動詞=助動詞	1	37	38
27	ツユ	露ユ		副詞	1	8	9
28	ヨワイ	齢ヒ		普通名詞	1	2	3
29	イウ	云イ	○	動詞	1	416	417
30	ナガイ	永ガ		形容詞	1	15	16
31	イワオ	巖ヲ		普通名詞	1	2	3
32	ナル	成ナル	○	動詞	1	51	52
33	ホラ	宝ウ螺		普通名詞	1	0	1
	総計				65	2838	2903

捨て仮名の機能（富士池）

一五五



三・三 捨て仮名表記の語と捨て仮名がない表記の語

表2に卷一二中の捨て仮名表記の語と捨て仮名がない表記の語を示した。「仮名なし表記」については、『今昔物語集』全体に範囲を広げて、捨て仮名がない表記でどのような語が表されているのか調査した。この調査の結果、捨て仮名によって語の書き分けがなされ、捨て仮名が漢字の読みを特定させる機能を持つ語があることが確認された。以下、複数の読みを持つ漢字の中から「夜」「後」の例を見ていく。

a. 夜

ここでは、「ヤ」「ヨ」「ヨル」と複数の読みがある「夜」について、見ていく。

- | | |
|-----------------------------|--------------------------|
| (1) 自ラ一ノ樹ノ下ニ留テ一夜ヲ過シツ。 | (卷第十七「依地藏示從鎮西移愛宕護僧語第十四」) |
| (2) 物語ナドシテ夜モ漸ク深更レバ入ヌ。 | (卷第十七「比叡山僧依虚空蔵助得智語第三十三」) |
| (3) 夜ル薪ヲ拾テ、火ヲ打テ木ヲ焼ク間、夜深更テ、： | (卷第十七「籠鞍馬寺遁羅利鬼難僧語第四十三」) |
| (4) 天皇夜ル清涼殿ノ夜ルノ大臣ニ御マシケルニ、： | (卷第二十九「九条堀河住女殺夫哭語第十四」) |

新編全集のルビによると、それぞれの読みは(1)「一夜」が「ヤ」、(2)「夜モ」(3)「夜深更」が「ヨ」となっている。(3)(4)の「夜」は、「夜ル」と仮名が添えられた捨て仮名の例で、「ヨル」と読むことがわかる。(3)の例は「夜ル」「夜」と書き分けることによって、語を明確にする働きがあると考えられる。また、(3)「夜ル薪」や(4)「夜ル清涼殿」のような例は、「夜」に続く語が漢字で記されており、「ル」がない場合、語と語の切れ目がやや不明瞭になるおそれがある。捨て仮名を用いることによって、読みを特定するとともに、語の境界を明確にしている可能性も考えられる。

表 2 捨て仮名表記の語と捨て仮名がない表記の語

読み	仮名あり		仮名なし表記											
	用例	巻12全体	用例 (読み)	数	用例 (読み)	数	用例 (読み)	数	用例 (読み)	数	用例 (読み)	数	用例 (読み)	数
1 ナンジ	汝子	20 261												
2 ムカシ	昔シ	5 33												
3 ムサ	赤ク	4 3												
4 サトリ	智リ	3 45	智(シル)	1										
5 ヨル	夜ル	2 56	夜(ヨ)	314	夜(ヤ)内別撰尾辞	20								
6 タデマツル	奉ツ	2 19	奉(カ)タマツル	11										
7 タビ	度ビ	2 6	度(ト)	78										
8 ヒトエニ	偏ハ	2 5												
9 カタチ	形子	1 119												
10 シルシ	験シ	1 26	験(ゲン)	10	験(ゲンスル)	6								
11 モノ	者ノ	1 22	者(シヤ・シヤ)	115	者(ノ)係助詞	3								
12 ノチ	後子	1 16	後(ウシロ)	80	後(シ)エ;後方	38								
13 ヒル	辱ル	1 16												
14 タム	為メ	1 13	為(ヌル)	839	為(ナス)	9								
15 ノメダ	間タ	1 12	間(マ)	36	間(テン・テン)	30								
16 ソモソモ	抑モ	1 12	抑(オサエル)	6										
17 ヒト	人ト	1 9	人(ニン)	247	人(カ)	84								
18 タマタマ	適マ	1 9	適(カ)カ)人名	1										
19 ユメ	夢メ	1 9												
20 キミ・ギミ	君ミ	1 7	君(ミ)蓮(キノ)タチ	41										
21 シルシ	注シ	1 6	注(シルス)	4										
22 トモ・トモ	共モ	1 4												
23 ヒシロ	聖	1 5	聖(シヨウ)	1										
24 カス	貫又	1 3												
25 ココロ	心コ	1 3	心(シン・ジン)	20										
26 フラス	非ラ	1 3	非(トカ)	1										
27 ユユ	露ユ	1 2												
28 ヨウイ	輪ビ	1 2												
29 イヤ	云イ	1 1												
30 ナガイ	永ガ	1 1												
31 イクオ	巖ヲ	1 1	巖(イウ)	4										
32 ナル	成ナル	1 1	成(ナス)	63										
33 ホラ	宝ウ喚	1 1	宝(ウカラ)	8										
総計		65 733												

b. 後

次に「アト」「ウシロ」「ノチ」と複数の読みがある「後」について、見ていく。

- (5) 牛、童ニ違テ堂ノ後ノ方ニ下リ来レリ。
(6) 盗人ノ出ヌル後ニ、門ニ走り出デ、音ヲ挙テ、
(7) 其ノ後チ本国ニ返テ此ノ事ヲ語ル。
(8) 此レヨリ後チ仏法ニ随テ、逆罪ヲ造ル事無カレ。
- (卷第二十四「関寺駈牛化迦葉仏語第二十四」)
(卷第二十九「明法博士善澄被殺強盜語第二十」)
(卷第十七「備中国僧阿清依地藏助得活語第十八」)
(卷第十二「越後国神融聖人縛雷起塔語第一」)

新編全集のルビによると(5)「後ノ」は「ウシロ」、(6)の「後ニ」は「アト」と読む。(7)(8)は「後チ」と仮名が添えられており、この捨て仮名によって「ノチ」と読むことが明確になっている。捨て仮名が用いられていることによって、漢字の読みが明確になっていることが確認できる。また、(7)(8)は「後」に続く語が漢字で記されており、「夜」の(3)(4)と同様に、語の境界を明確にしている可能性も考えられる。

このように「夜ル」「後チ」の用例は、漢字の読みを明確にするとともに、捨て仮名の有無と後続の文字種には関連があることを示唆していると言えるだろう。これについては、他巻に調査範囲を拡大し、同様の例がどの程度あるのか、確認する必要がある。その一方で、(3)で「夜深更テ」とあるように、漢字に続く場合であれば必ず捨て仮名が添えられるというわけではない。ここから『今昔物語集』では臨時的に捨て仮名を付すことがあったと考えられる。

表3 頭注で指摘された以外の漢字のみ表記と漢字
仮名交じりの双方がある語¹⁰

	語彙素読み	語彙素	書字形	品詞	頻度	
1	アワレ	哀レ	哀	普通名詞/形状詞可能	5	5
			哀レ			
2	イトナミ	営ミ	営	普通名詞	3	1
			営ミ			
3	オモイ	思イ	思	普通名詞	2	2
			思ヒ			
4	チカイ	誓イ	誓	普通名詞	4	3
			誓ヒ			
5	クルシミ	苦シミ	苦	普通名詞	2	2
			苦ビ			
6	サトリ	悟リ	智	普通名詞	6	3
			悟リ			
7	チギリ	契リ	契	普通名詞	4	2
			契リ			
8	ナガレ	流レ	流	普通名詞	1	1
			流レ			
9	ネガイ	願イ	願	普通名詞	10	1
			願ヒ			
10	ハジメ	初メ	初	普通名詞	3	6
			初メ			
			始メ			
11	メグリ	巡リ	通	普通名詞	4	1
			廻リ			
12	クスリ	薬	薬	普通名詞	2	1
			薬リ			
13	ケムリ	煙	煙	普通名詞	2	1
			煙リ			
14	ヒカリ	光	光	普通名詞	5	3
			光リ			
15	アキラカ	明ラカ	明カ	形状詞	1	4
			明ラカ			
16	オオキ	大キ	大	形状詞	17	14
			大キ			
17	オロカ	愚カ	愚	形状詞	5	1
			愚カ			
18	タイラカ	平ラカ	平カ	形状詞	1	2
			平ラカ			
19	イカデ	如何デ	何	副詞	1	3
			何デ			
20	イカニ	如何ニ	何	副詞	6	9
			何ニ			
21	シカ	然	然	副詞	1	2
			然カ			
22	シバラク	暫ク	暫	副詞	2	10
			暫ク			
23	スコシ	少シ	少	副詞	5	8
			少シ			
24	モシ	若シ	若	副詞	3	15
			若シ			
25	モツバラ	専ラ	専	副詞	9	2
			専ラ			
総計					103	106

捨て仮名の機能（富士池）

一五九

三・四 頭注で指摘された以外の漢字のみ表記と漢字仮名交じりの双方がある語

表3に頭注で指摘された以外の漢字のみ表記と漢字仮名交じりの双方がある語を示した。普通名詞には「営／営ミ」のような動詞連用形転成名詞が多く見られる。これらは活用語尾を明記したものと同様と考えられ、一種の送り仮名と考えていいだろう。送り仮名と考えられるものを除くと、「哀／哀レ」「明カ／明ラカ」「愚／愚カ」「専／専ラ」「薬／薬リ」等がある。漢字表記と漢字に仮名が添えられた表記があるわけだが、漢字の読みが複数ある語とは言え

ず、「漢字の読みをはっきりさせる」という点から考えると、捨て仮名とは言いがたく、頭注で捨て仮名と指摘されなかった一因と考えられる。

その一方で、形態素解析という観点から考えると、例えば「明カ」「専」等は形態素の一部の不足、「葉リ」は形態素の重複と捉えられ、形態素解析辞書を対応させる必要がある⁽¹⁾表記であった。

三・五 『今昔物語集』 卷一二における捨て仮名の機能

三・二節から三・四節まで、『今昔物語集』 卷一二を対象として、捨て仮名の実態を報告した。その中で、『今昔物語集』 卷一二から見られる捨て仮名の機能に関して、以下の四点を指摘した。

①『今昔物語集』の捨て仮名は必ずしも「漢字の読みをはっきりさせる」ものではない。臨時的に付されたもの、当時の慣習的な表記と考えられるものが多く存在する。

②全訓捨て仮名は活用語に見られ、「漢字の読みをはっきりさせる」ものであったと考えられる。

③同文脈に同じ漢字を用いて捨て仮名の有無で語を書き分けている例があることから、「読みをはっきりさせる」目的で捨て仮名が付されることがあったと言える。

④複数の読みを持つ漢字と漢字が続く場合に捨て仮名が付されることがあり、これは語の境界を明確にする目的があった可能性がある。

『今昔物語集』 卷一二の捨て仮名を見ると、①で示したように、多くは、読みをはっきりさせるという読み弁別機能は見出されず、慣習的な表記と見た方がよいものであった。一方、②や③で示したような「漢字の読みをはっきりさせる」機能を持つものも存在する。④で示したような、後続の文字種によって捨て仮名が付される例から、捨て仮名は読み弁別機能だけではなく、語の境界を表す機能を持っていた可能性が示唆される。なお、新編全集の頭注で捨て仮名との指摘がなかった表記は、送り仮名に相当するものか、「読みをはっきりさせる」機能がないものであったこともあわせて確認された。

四 『法華百座聞書抄』の捨て仮名

四・一 調査の概要

『法華百座聞書抄』にも「佛ケ」「前キ」といった捨て仮名ないし捨て仮名のような表記が散見される。形態素解析においては、形態素末尾の重複に当たるため、前処理をすることが望ましいが、捨て仮名であることを示す情報が無い。そこで、総索引の情報を参考に捨て仮名らしき表記を作業者が独自に認定し、タグ付けを行った。その結果、捨て仮名らしき表記を持つ語五六種類が捨て仮名タグ付けの対象となった。その後、形態素解析結果の人手修正を行った。人手修正結果について、漢字と仮名を用いて表記されている形態素を対象に捨て仮名らしき表記を調査したところ、該当する語は六二種類となった。

四・二 『法華百座聞書抄』の捨て仮名

表4に『法華百座聞書抄』中の捨て仮名ないし捨て仮名のような表記を持つ語を示す。このうち、『今昔物語集』で捨て仮名のタグ付け対象となった表記は、表4の「今昔あり」に「○」としたもので、一八種類あった。

新編全集『今昔物語集』は五八万語超^②であるのに対して『法華百座聞書抄』は約二万語（ともに延べ語数）であり、資料規模は三〇分の一程度と格段に小さい。一般的には、資料規模が大きいものについて先行して作業すると、後から作業する小規模の資料については新たに多くの作業が発生しないことが多い。しかし、新編全集『今昔物語集』の捨て仮名二四〇種類超のうち『法華百座聞書抄』に共通するのは一八種類であり、『法華百座聞書抄』六二種類の捨て仮名の約三二％に過ぎない。つまり、三分の二超は『法華百座聞書抄』のみに現れた捨て仮名ということになる。ここから、資料独自の表記がある様子がうかがわれる。

『法華百座聞書抄』には全訓捨て仮名が比較的多く見られる。さらに捨て仮名で表記された語が、他の箇所では片仮

表4 『法華百座聞書抄』中の捨て仮名

	読み	全訓	種類	数	今昔あり		読み	全訓	種類	数	今昔あり
1	ムカシ		昔シ	6	○	32	ハヤシ		林シ	1	
2	イノチ		命チ	6		33	ナニゴト	○	何ナニコト	1	
3	トキ		時キ	5	○	34	トモ	○	共トモ	1	
4	ナンジ		汝チ	4	○	35	ノリ	○	説ノリ	1	
5	トシゴロ		年シコロ/年シ来ロ	4		36	トシ		年シ	1	○
6	タビ		度ヒ	4	○	37	トコロ		所ロ	1	○
7	ミル	○	見ミ	3		38	メ	○	妻メ	1	
8	ホトケ		佛ケ	3	○	39	チョク	○	勅チヨク	1	
9	ノチ		後チ	3	○	40	フボ	○	父フ母ホ	1	
10	モロモロ		諸ロ	3		41	チチハハ		父子母ハ	1	
11	アイダ		間ダ	3	○	42	タマウ	○	給タマ	1	
12	ニヨシキ	○	女職シキ	2		43	タグイ		類クヒ	1	○
13	トク	○	説ト	2		44	ハベル	○	侍ハムヘリ	1	○
14	ロウ	○	樓ロウ	1		45	コト	○	殊コト	1	
15	ラク	○	樂ラク	1		46	コ	○	子コ	1	
16	カンハツ	○	旱魃ハツ	1		47	シシ	○	完シ、	1	
17	チュウトウ	○	儉チウ盗タウ	1		48	スガタ	○	躰スカタ	1	
18	ラン	○	亂ラン	1		49	カミ		髪ミ	1	
19	ヨウモウ	○	楊ヤウマウ	1		50	カゼ		風ゼ	1	
20	ワレ	○	我ワレ	1		51	カズ		數ス	1	
21	リヤク		利益ク	1		52	オトコ	○	男ヲトコ	1	○
22	ヨルヒル		夜ルヒル	1		53	ナンガン	○	男ナム官クワン	1	
23	ヨル		夜ル	1	○	54	オケ	○	桶ヲケ	1	
24	ヨ	○	世ヨ	1		55	イマ		今マ	1	○
25	ヨシ		由シ	1		56	ヒト タビ		一ト 度ヒ	1	
26	ヨウゴ		擁護コ	1		57	ワレ		我レ	7	
27	ミ ナ	○	御ミ 名	1		58	タトエ		喩ヒ	2	
28	ミチシルベ		道チシルベ	1		59	イヨイヨ		彌ヨ	1	
29	ミチ		道チ	1		60	ウエ		上ヘ	1	○
30	サキ		前キ	1	○	61	オノオノ		各ノ	1	○
31	フチュウ	○	不注チウ	1		62	カタチ		形チ	1	○
							総計			104	

名のみで表記されることがあった。読みをはっきりさせるという目的からすると、片仮名表記が最も明確であり、次いで全訓捨て仮名ということになる。全訓捨て仮名が付された語には漢語が多い。また、「利益ク」「擁護コ」といった漢語の読みの末尾を表す仮名も見られた。漢語の捨て仮名に関しては、読みが複数あるうちのひとつであることを示すというより、その漢語自体の読みを示すものと考えられ、読みをはっきりさせる機能を持つものと考えられる¹³。そのほか、「父フ母モ」（ブモ）と「父チ母ハ」（チチハハ）、「説ト」（動詞・説く）と「説ノリ」（名詞）のような表記があることから、同じ漢字で表記される語それぞれに対して捨て仮名を付すことよって語の書き分けをしている様子が確認された。

五 一 二世紀前半の片仮名漢字交じり文資料における捨て仮名の機能

『法華百座聞書抄』と『今昔物語集』はほぼ同時代の資料であるが、捨て仮名の使用実態をみるかぎり、大きな違いがあることが明らかになった。

『今昔物語集』巻一二では、捨て仮名に漢字の読みを明示する機能があるとは必ずしも言えず、全訓捨て仮名や同じ文脈に読みの紛らわしい箇所がある場合など、漢字の読みを明示する捨て仮名は限られた条件で見られるものであった。それに対して、『法華百座聞書抄』の捨て仮名には、当時の慣習的な表記のほかに、語の弁別機能を持つものが明らかに存在していた。また、現代の振り仮名に相当する、漢語の読みを示す捨て仮名が見られた。

酒井（一九六八）では、捨て仮名は片仮名宣命体に特徴的なものとして位置づける一方で、聞き書き類や筆録類においては読みを忠実に再現できるように捨て仮名が付される傾向があることが指摘されていた。今回の調査結果でも、『法華百座聞書抄』における捨て仮名使用の実態からは、表記との関わりをほかに、読みを明示することが捨て仮名を付す動機となっている様子が見られた。『法華百座聞書抄』は口頭詞章の唱導に類するものとされ、漢字の読みの明示を期する資料であると言える。『今昔物語集』巻一二との捨て仮名使用の実態の違いは、資料性の違いを反映した

ものと考えられる。

六 おわりに

コーパス構築の中で、一つひとつの表記を確認する作業を行っていくことによって、これまで例という形で示されてきた捨て仮名が、どの箇所にもどのような表記で存在するのか、一作品通して何箇所存在するのかといったことを明らかにすることができる。同じ形式で複数の資料の情報が整備されていくことによって、新しく見えてくるものがあるだろう。今回の調査で見てきた『今昔物語集』と『法華百座聞書抄』の捨て仮名表記にどの程度の重なりがあるのかといった問題は、悉皆調査によって明らかにされたものである。

捨て仮名（ないし捨て仮名的な表記）は漢字使用が一般化してきた院政期から鎌倉期にかけて多く用いられるようになったと考えられるが、その使用はその後長く続く。捨て仮名の問題は、近代語まで含めた歴史的な資料を扱うコーパスの問題と言える。ここで、形態論情報付きコーパスの構築にあたり、捨て仮名をどのように処理していくとよいかという問題を考えてみたい。

形態素解析という点から捨て仮名を考えたとき、「漢字の読みをはつきりさせる」という機能はあまり関係なく、形態素の一部の過不足が問題となる。そのため、前処理で可能な限り問題を取り除くことが望ましい。その一方で、形態素解析の対象となるテキスト中に、形態素の過不足がある語が存在するかどうか、またどのような表記なのか、事前に把握することは難しい。例えば『今昔物語集』で得られた捨て仮名リストがあっても、『今昔物語集』（本朝部）の三〇分の程度の規模である『法華百座聞書抄』の捨て仮名は三分の一弱しかカバーされないことが明らかになった。これは、捨て仮名のありようは資料によって異なり、その結果として前処理のみで網羅的に処理することは困難であることを意味している。形態素の重複を解決するという目的を考えると、捨て仮名に関するテキスト整形のタイミングは前処理となるが、これを効率的に行うためには、形態素の重複となった表記のリストを作成し、新しい資料

を処理するたびにそのリストを拡充していくといった方策が考えられる。また、形態素解析結果の人手修正を通し、読みを確定させていく中で、前処理で形態素重複を解決した結果に過不足はないか確認する必要がある。

注

- (1) ここでの「形態論情報」とは、見出し語、読み、品詞、活用型、活用形、語種等の情報を指す。
- (2) 『今昔物語集』全体についてのテキスト整形については、富士池ほか(二〇一二)に示した。
- (3) 頭注の記述は一樣ではないため、捨て仮名に関する頭注を洗い出し、誤写の可能性があるもの、衍字か捨て仮名かが明確でないもの等については、テキスト処理対象から除外した。
- (4) 山田ほか(一九五九)二〇ページ。
- (5) 酒井(一九六七)六〇ページ。
- (6) 酒井(一九六八)三九ページ。
- (7) 読み・種類欄は必要に応じて濁音表記とした。
- (8) この箇所については、「夜深更」という定型な表現であり読みはある程度明確であるため、「夜ヨ」といった全訓捨て仮名が必要などろでなかったとも解釈できる。
- (9) 「クスリ」に対して「クスル」という動詞もあるが、『日本国語大辞典 (Japan Knowledge)』の用例は和訓葉であり、『今昔物語集』の頃に名詞からの転成動詞はなかったと考える。
- (10) 構築中のコーパスは漢字片仮名交じり文を漢字平仮名交じり文に変換しており、Index中の語彙素・書字形も漢字平仮名交じり表記となっている。形状詞は形容動詞語幹に当たる品詞。
- (11) 実際には「薬リ」は『今昔物語集』の形態素解析結果人手修正時に辞書に追加することになったが、「明カ」「専」は先行して進められていた近代語コーパス整備時に辞書に追加されていた。
- (12) 語数は短単位数。
- (13) 読みの冒頭ないし末尾のみを仮名で付したものは機能としては振り仮名に近いと考えられる。しかし『法華百座聞書抄総索引』において、例えば「りやくす(利益す)」項に「利益_ツセシメ給へ」「利益シタマヒケレ」が示されていることから、振り

仮名(ルビ)としては処理しないこととした。

参考文献

- 小本曾智信・小椋秀樹・田中牧郎・近藤明日子・伝康晴(二〇一〇)「中古和文を対象とした形態素解析辞書の開発」情報処理学会研究報告 人文科学とコンピュータ vol.2010-CH85 No.4
- 河瀬彰宏・野田高広(二〇一四)「和文体および漢文体をもつ資料の構造化―法華百座聞書抄の事例研究―」第六回コーパス日本語学ワークショップ予稿集、一二九―一二六ページ
- 小林芳則(一九七二)「中世片仮名文の国語史的研究」『広島大学文学部紀要』特輯号三
- 小林芳則(一九七六)『校註法華百座聞書抄』(武蔵野書院)
- 小井憲二(一九六七)「今昔物語集の資料性」山梨県立女子短期大学紀要一、四七―七一ページ
- 酒井憲二(一九六八)「表記史上の問題―捨てがなの場合―」語文三二、三五―四五ページ
- 佐藤武義・前田富祇(編集代表)(二〇一四)『日本語大事典』(朝倉書店)
- 説話集研究会(編)(一九五二)「打聞集總索引付」国語学資料第八輯
- 飛田良文・遠藤好英・加藤正信・佐藤武義・蜂谷清人・前田富祇(二〇〇七)『日本語学研究事典』(明治書院)
- 富士池優美・河瀬彰宏・野田高広・岩崎瑠莉恵(二〇一三)『今昔物語集』のテキスト整形」第四回コーパス日本語学ワークショップ予稿集、一二五―一三四ページ
- 富士池優美・岩崎瑠莉恵(二〇一四)『今昔物語集』の捨て仮名」第五回コーパス日本語学ワークショップ予稿集、二六一―二七〇ページ
- 馬淵和夫・国東文麿・稲垣泰一(一九九九―二〇〇二)『今昔物語集 一〜四』新編日本古典文学全集三五〜三八(小学館)
- 安田章(一九九七)『鈴鹿本 今昔物語集 影印と考証』(京都大学学術出版会)
- 山岸徳平(一九七六)『法華修法二百座聞書抄』勉誠社文庫四(勉誠社)
- 山田孝雄・山田忠雄・山田英雄・山田俊雄(一九九九―一九六三)『今昔物語集 一〜五』日本古典文学大系二二〜二六(岩波書店)

参考URL

通時コーパスの設計 (国立国語研究所) <https://www.ninjal.ac.jp/research/project/a/corpus/>
Japan Knowledge (小学館) <http://japanknowledge.com/>

付記

本稿は、第五回コーパス日本語学ワークショップにおけるポスター発表の内容をもとに改稿したものです。発表にあたり、岩崎瑠利恵氏に資料整理等多大なご支援をいただきました。記して感謝申し上げます。また、国立国語研究所共同研究プロジェクト「通時コーパスの設計」、及び日本学術振興会科学研究費基盤研究B「和漢の両系統を統合する平安・鎌倉時代語コーパス構築のための語彙論的研究」(課題番号24320086)の成果の一部です。

